

■ Article

## M-GTAを用いた箱庭制作面接における連続性に関する促進機能についての検討

楠本和彦

(南山大学人文学部心理人間学科)

### 要旨

本稿は、継続的な箱庭制作面接における箱庭制作者の主観的体験のデータを基に、面接の連続性に関する促進機能の理論生成を目的とする。

二人の調査参加者の継続的な箱庭制作面接のデータを修正版グランウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)を用いて分析した。その分析結果の内、本稿の目的を達成するため、⑪【単一回の制作過程・作品と作品の連続性や変化の交流】と⑫【箱庭制作面接のプロセスと心や生き方の変化・成長の交流】内の6概念について、検討した。検討の結果、連続性の促進機能が確認された。箱庭制作面接の連続性により、箱庭作品、箱庭制作者の心や生き方に変化が生まれ、箱庭制作者の自己理解・自己実現・自己成長が促進されることが見い出された。また、箱庭制作面接の連続性が、箱庭制作者のイメージ体験(自律性、集約性、象徴性など)を促進することが見い出された。概念【面接内外を貫いて内的プロセスを生きる】に示されるような態度は、箱庭制作者自身がコンステレーションに気づき、それを読み、意味を与えることができるようになる一要因となる、と考えられた。また、本概念は、面接内外のプロセスの交流により生じた連続性とみることができた。本概念に示されるような態度によって、面接内外のプロセスが連動・総合されて、面接内外を貫く連続性が生まれる、と考えられた。

キーワード 継続的な箱庭制作面接、連続性、促進機能、箱庭制作者の主観的体験

### I. 問題および目的

本稿は、継続的な箱庭制作面接における箱庭制作者の主観的体験(subjective experience)のデータを基に、面接の連続性に関する促進機能の理論生成を目

的とする。本稿では、制作者の自己理解・自己実現・自己成長の促進に寄与する箱庭制作面接の機能を「促進機能」、それに関与する要因を「促進要因」とする。また、『交流』とは、促進要因同士が相互作用により、相互に影響を及ぼし合うプロセスをいう。

本稿は、継続的な箱庭制作面接のデータを基にしている。A氏は10回の箱庭制作面接を、B氏は8回の箱庭制作面接を実施した。箱庭療法では、面接が継続される中で、クライアントの心に変化や成長が生じてくる。そのため、箱庭療法で継続的に箱庭制作が成された場合、その作品を系列的に理解しようとするセラピストの態度が重視され、事例研究が中心的な研究方法となっている（河合、1969、p.15、p.31、他）。

それに対して、箱庭制作過程を精緻に分析しようとする実証的研究では、継続的な箱庭制作に焦点を当てている研究が希少である。平松（2001）では、12回に亘る継続的な箱庭制作の面接がなされ、その事例研究が行われている。そして、それらの事例について、箱庭療法面接のための体験過程スケールを用いた実証的な研究を行っている。しかし、その実証研究は、説明過程における体験過程を評定するものであり、箱庭制作過程での体験を直接的に評定したものではない。中道（2010）は、教育カウンセリングにおける中道自身のクライアント体験での主観的体験のデータに基づき、研究を行った。中道がクライアントとして、Lセラピストとの間で行われた30回の箱庭制作のうち、第8回のセッションが取り上げられた（pp.200-223）。しかし、この研究は、箱庭制作におけるクライアントの内的表現とクライアントーセラピストの関係性との相互作用に焦点を当てているため、継続的な箱庭制作による箱庭制作者の内的プロセスの変化は取り上げられていない。

近田・清水（2006）は、10回に亘る継続的試行箱庭療法における箱庭制作者の主観的体験に焦点を合わせ、その変遷の分析を行っている。2名の箱庭制作者に対して、以下のようなデータ収集法をとった。a.箱庭制作過程が録画された。b.作品の完成後、作品の説明を求めた。c.ビデオ録画が再生され、半構造化面接によるインタビューが行われた。d.10回の箱庭制作終了後、振り返り面接が行われた。そのデータを以下のように分析した。a.面接記録の逐語録化がなされた。b.データの文節化とオープンコーディングが実施された。c.面接データと箱庭制作過程の対応表が作成された。その対応表には、制作経過・質問、語り、コード名、制作過程の映像が記載された。d.コードのグルーピングがなされた。その結果、〔玩具を選択する際の経験〕〔砂箱に表現する際の経験〕〔意識的にとっていた構え〕〔意図せずに生じた経験、心理状態〕〔箱庭表現や制作体験に対する評価〕〔箱庭制作が日常に及ぼした影響〕の6つのカテゴリーが抽出された。e.2事例に対して、6カテゴリーに属するコードがどのように生じているか分析された。f.eで作成された資料を基に、2事例の制作体験過程が記述された。それらの分析を通して、箱庭表現過程で起こることについて考察

がなされた。そして、a.箱庭表現によって内的な体験、感情により深く触れ、気づきを深める、b.箱庭表現過程で、意識と無意識の交流が深まり、内界に存在する要因の影響を受けて、自我のあり方に変化が生じる、c.表現の展開に伴って、意識と無意識の間の対立、葛藤が強まり、停滞や抵抗の動きが生じることがある、の3点に関する知見が得られた。近田・清水（2006）には、箱庭制作過程における構成やそれを巡る制作者の主観的体験が詳細に記載されている。データに基づいた実証的な研究によって、箱庭制作面接において起こっていることを記述・検討した興味深い論考となっている。ただ、制作体験をコード別に分類した分析が紙面の関係上、十分に記されておらず、どのような分析がなされたのか、十分に明示的になっていない点が惜しまれる。

石原（2013）は、石原自身がセラピストとして継続的な箱庭療法を行っていたクライアントが、偶然に他の人物の立会いの下で置いた箱庭作品（箱庭X）と、石原が立会いの下でそのクライアントが置いた箱庭作品との比較研究を行っている。その中で、箱庭Xと石原との箱庭療法の中でそのクライアントが置いた第1回箱庭作品（箱庭#1）と、箱庭Xの翌日におかれた第12回箱庭作品（箱庭#12）との異同について検討している。箱庭Xは他の人物との面接中に置かれたものであることに加えて、箱庭#1や箱庭#12はセラピーの中で置かれたものであるため、構成中の言動や主観的体験のデータ取得には当然のことながら限界がある。そのため、共通アイテム数などの統計的分析や構成内容についての詳細な記述をデータとして検討がなされている。その結果、箱庭Xは箱庭#1との間に高い類似性をもつことが明らかになった。その結果を基に、箱庭療法をイントラパーソナルな要因と、セラピスト-クライアント関係というインターパーソナルな要因の両要因から検討している。箱庭表現が、その両要因を掛け合わせたところに現れてくるものとの仮説をもとに、箱庭Xと箱庭#1との間の高い類似性を説明している。箱庭療法において、面接が継続されることによるクライアントとセラピストとの関係性の変容と箱庭表現の変容の連関を巡る興味深い実証的研究である。

上記研究以外の箱庭制作過程を精緻に分析しようとする実証的研究では、調査・分析回数に限定を加えている。調査または分析する同一調査参加者の箱庭制作回数を1回または2回に限定する研究は多い（石原、1999、清水、2004、伊藤、2005、石原、2008、大石、2010、花形、2012、他）。そのため、楠本（2012）および楠本（2013a）では、継続した箱庭制作面接における箱庭制作過程および箱庭制作者の内的プロセスの変化や面接の展開（連続性）に焦点を当てた。

楠本（2012）では、一人の箱庭制作者（A氏）のデータに基づいた分析であった。そこで本稿では、もう一人の箱庭制作者（B氏）のデータを加え、修正版グランウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を用いた分析によって、継続的な箱庭制作面接における箱庭制作者の主観的体験のデータを基に、面接の連続性に関する促進機能の理論生成を目的とした。

## II. 方法

本稿の基になった研究の方法については、以前に詳述した（楠本、2012、楠本、2013a、楠本、2013b）。方法の詳細に関しては、上記論文を参照されたい。本稿では、方法の概要を示すにとどめる。

### II-1. 調査目的・調査参加者・調査方法

本調査は、箱庭制作過程と説明過程における、a.箱庭制作者の主観的体験の明示化、b.箱庭制作・説明過程の促進機能の探求、を目的として行われた。

本調査の箱庭制作者（調査参加者）は以下の2名であった。両調査参加者とも、心理的問題のセラピーのために、箱庭制作面接を希望したのではない。A氏は、40代女性、夫との二人家族。女性性とキャリア形成に課題を感じ、自己理解・自己実現・自己成長のために面接を希望した。B氏は、40代男性、独身。心理療法家としての教育分析のために面接を希望した。そのような申し出があった際、筆者は選択肢の一つとして、本調査参加者として箱庭制作を10回程度継続的に実施することができることを伝え、両氏がそれを選択した。

本調査は、以下の1)箱庭制作面接、2)ふりかえり面接、3)全過程のふりかえり面接を複数回行う契約で実施された。A氏は、箱庭制作面接およびふりかえり面接（各10回）、全過程のふりかえり面接（4回）を実施した。B氏は、箱庭制作面接およびふりかえり面接（各8回）、全過程のふりかえり面接（1回）を実施した。B氏の場合も、箱庭制作面接およびふりかえり面接を各10回、全過程のふりかえり面接を複数回行う契約であったが、B氏の勤務地が遠方になったため、上記の実施形態となった。

#### 1) 箱庭制作面接

この面接では、通常の箱庭療法と同様の箱庭制作過程と説明過程に、調査目的のための言語化の過程が追加されている。そのため、説明過程は以下の2つの過程から構成された。1回の時間は、制作過程・両説明過程を含めておよそ1時間～1時間30分であった。この過程はVTR録画された。

##### (1) 自発的説明過程

箱庭制作後、通常の箱庭療法と同様の説明過程（自発的説明過程）が実施された。自発的説明過程で、箱庭制作者は、制作中と制作終了時点での意図、感覚、感情、イメージ、連想、意味などを自発的に語った。調査者は、それを傾聴することを中心的な態度として臨んだ。

##### (2) 調査的説明過程

自発的説明過程終了後、続けて、調査目的のため、調査的説明過程が実施された。調査的説明過程で調査者は、より積極的に対話や質問を行い、箱庭制作過程と自発的説明過程における、箱庭制作者の主観的体験の言語化を促した。

#### 2) ふりかえり面接

##### (1) 内省報告作成

箱庭制作面接のVTRを箱庭制作者・調査者が視聴し、内省報告を書き綴った。

内省報告の内容、様式を以下に示す。調査者が設定した「意図」「感覚・感情・イメージ」「連想」「意味」の4カテゴリーについて、箱庭制作過程では5要因(a.ミニチュアの選択、b. ミニチュアの配置、c.砂の造形、d. ミニチュア・造形の変更、ミニチュアの位置や方向の変更、e.セラピストの存在・行動)に関して、説明過程では箱庭制作者や調査者の言動に関して、内省報告を記述した。箱庭制作過程全体を、箱庭制作者は任意に区切り、その箱庭制作過程毎に内省報告した。例えば、A氏は、第1回箱庭制作面接を17過程に区切り、内省報告した。

## (2) ふりかえり面接

ふりかえり面接は、箱庭制作面接における箱庭制作者の主観的体験を、調査者と共有するとともに、その内容を明確化するために行われた。ふりかえり面接は、箱庭制作面接の約2週間後に実施された。ふりかえり面接では、箱庭制作者の内省が報告され、調査者はそれを傾聴した。調査者は、意識化が過度な知性化とならないように考慮しつつ、明確化したい点に関して、質問や対話を行った。箱庭制作者の内的プロセスへの影響を考慮して、調査者の内省報告は控えた。その会話は録音された。

2) のふりかえり面接の約2週間後に、次の1) 箱庭制作面接が実施された。

## 3) 全過程のふりかえり面接

ふりかえり面接の最終回終了後に、全面接過程をふりかえるための面接を実施した。ふりかえりの内容、形式は、箱庭制作者に委ねられた。3) は録音された。

A氏第10回ふりかえり面接終了約3ヶ月後に、全過程のふりかえり面接を開始した。3) は、ほぼ1ヶ月に1度、計4回行われた。B氏第8回ふりかえり面接終了約1ヶ月後に、全過程のふりかえり面接を1回実施した。

## II-2. 分析方法

### 1) 基礎資料の作成

すべての面接の終了後、調査者がVTRを視聴し、制作過程内容をできる限り事実に忠実に記述した。箱庭制作面接の両説明過程とふりかえり面接での会話を逐語録化した。

その後、箱庭制作面接各回の箱庭制作過程、自発的説明過程、調査的説明過程、内省報告の各データの関連を探るために、各過程のデータを箱庭制作者が任意に区切った箱庭制作過程毎に、一覧表に再構成し、比較可能とした(表1にA氏第2回面接の一部抜粋を例示)。ただし、B氏の場合、内省報告が単語で記されている場合も少なくなかったため、その主観的体験をより明確に把握するため、当該箇所に関するふりかえり面接での言及の逐語録を必要に応じて一覧表に追加した。

箱庭制作者の内省報告に記された、各箱庭制作過程における制作行為を、制作過程の〔〕内に記した。制作過程内容を調査者が一部追加した。両説明過程、

表1 A氏第2回箱庭制作面接における主な主観的体験（楠本、2013aを一部抜粋）

制作過程	自発的説明過程	調査的説明過程	内省報告	ふりかえり面接
(3) [川によって二つに分けられた土地を見ている]	〔制作中の苦しさ〕 (3) しばらく作って、苦しいですよ。なんかくはあ、苦しい>うん。苦しいってうか。人気がないというか。寂しいというか。二つに分かれちゃったなと思って。(後略)		(3) [制作・感覚] 大地もいまだ生命がなく、乾燥していて、荒涼としたイメージが私に迫ってきた。「こんなに広い川を作ってしまったでしょう」[生命のない大地がおそろしい]と感じていた。	
(11) [白い石を左の陸地奥、川岸に置く。左手前の山を奥に移し、ふもとに土偶と埴輪を置く]	〔石と土偶、埴輪〕 (11) この辺の手前のほうにはちょっと置けない。手前のほうにいる生き物とはちょっと違う生き物のような気がして置けなかったですね。	〔土偶、埴輪〕(11) なんか命なんだけど、命を持つてる人として持ってきたんですけど。半分命じゃないものになっているってうか。何ていって言うんでしょうね。人間ではない命になってるというか。そういう感じがして、こう動物や人の世界には、ちょっと、いけないんだな、入ってきちゃっていう。そういう感じですかね (後略)	(11) [制作・感覚] 土偶もいのちの表現だと思っていたが、ふもとに置いたことで、命としての人間の代わりのももあるし、山の番人のような気もしてきた。[制作・意味] 石は「かたまり」。自然の造形物だけれども、 <u>生命感</u> は薄くて、動き出すことがないもの。私が左側に置きたかった命とは、そのようなものだったのではないか。 <u>はっきりとした形をまだ持たない、抽象的なもの</u> がよかったのだと思う。	〔土偶、埴輪〕(11) 土偶はだいたい神様の方に近い。象徴的になってしまっている。深く土の中にもぐって何世紀も経って命の感覚がひどく微かになってしまっている。 〔お山〕(11) <u>信仰の対象になるようなお山のイメージ</u> がありましたね。そうすると、お山のふもとに土偶達はいかにもふさわしい。ちょうど山と平地とのちょうど境目辺りに居てくれると、ちょうどころあいがいい。

内省報告、ふりかえり面接の〔〕内の言葉は調査者が記述した。調査者の発言は<>で示した。両説明過程で説明が複数過程に亘る場合、適切と思われる箱庭制作過程に分類した。

また、論文として記述する段階で、その論文の結果および考察に挙げたデータに下線を付した。

## 2) M-GTAを用いた分析

継続的な箱庭制作面接における箱庭制作者の主観的体験を精緻に分析することを通して、箱庭制作面接が箱庭制作者の自己理解や自己実現や自己成長をどのように促進するのか、その機能について検討するために、M-GTAを用いて、データに密着した理論生成を行った。

A氏とB氏の自発的説明過程と調査的説明過程の逐語記録、内省報告を、木下(2003)のM-GTAに従い、質的に分析した。M-GTAでは分析テーマと分析焦点者の2点から分析を進める。分析テーマを「継続的な箱庭制作面接における促進機能」とした。グラウンデッド・セオリーの適用可能範囲を示す分析焦点者を「自己理解・自己実現・自己成長を目的として、継続的な箱庭制作を実施した心理的に健康な制作者」とした。自発的説明過程、調査的説明過程、内省報告それぞれの独自性と共通性を確認するため、概念生成はそれらの過程毎になされた。1概念につき、1分析ワークシートを作成し、データから概念を生成した。ワークシートには、概念名、概念の定義、具体例、分析中の思考の記述である理論的メモを記した。類似例の確認だけでなく、対極例の比較を行うことにより、概念の解釈が偏る危険を防いだ。各過程で、調査参加者のデー

タからの概念生成と修正が終了したと判断した段階で、主観的体験に関する各過程（自発的説明過程、調査的説明過程、内省報告）の概念を総合的に検討した。そして、同一であると判断された概念は、具体例を統合し、一つ概念として扱った。概念相互の関係を検討し、カテゴリーを生成した。

そのデータを基に、結果図（図1）を作成した。図1の結果図は、A氏のデータを基に、M-GTAを用いて作成され、論文として公表された（楠本、2012）。その後、B氏のデータも加え、M-GTAの分析を行ったが、結果図の変更の必要性はなかった。ただし、概念名やサブカテゴリーには修正が必要であったため、その修正を行った。

恣意性を極力排除するため、論文をまとめる過程で箱庭療法や質的研究を実践している研究者に指導を受けた。また、調査参加者に原稿の内容確認を依頼し、両調査参加者のコメントに基づいて、若干の字句修正を行った。

### Ⅲ. 結果および考察

#### Ⅲ-1. 促進要因間の交流の全体像

楠本（2012）に基づき、以下に箱庭制作面接における促進要因間の交流の全体像を示す。分析テーマ、分析焦点者に照らして、カテゴリーや概念に基づいた適切なモデルか検討し、結果図（図1）を作成した。M-GTAの分析結果から、促進要因が単独で、箱庭制作面接における自己理解・自己実現・自己成長に寄与するのではなく、それぞれの促進要因同士が交流し、影響を及ぼし合う過程において、促進機能が働くと捉えられた。そこで、本稿では、箱庭制作面接の中心的な促進機能を、箱庭制作面接の促進要因間の『交流』であると解釈した（図1）。大きくは、『単一回の制作過程・作品』と『箱庭制作面接のプロセス』と『制作者の生活・人生・環境』という場が相互に交流し、影響を与えあっていると考えられた。

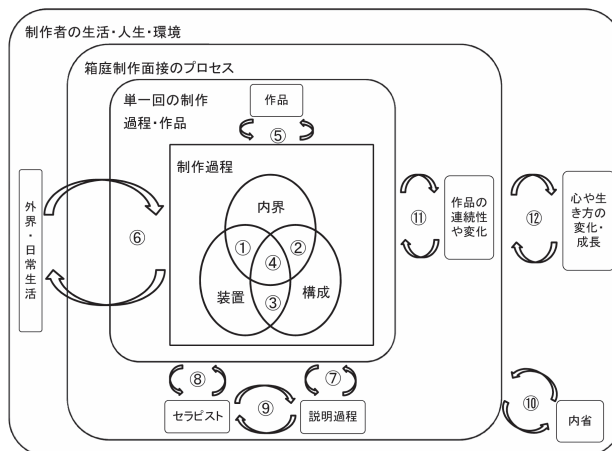


図1 箱庭制作面接の促進要因間の交流（楠本、2012）

詳細には、それぞれの場の各促進要因が交流し、相互に影響を及ぼし合っている。『単一回の制作過程・作品』の『制作過程』では「内界」と砂箱、砂、ミニチュアという「装置」と「構成」とが交流している(①、②、③、④)。さらに、『制作過程』は「作品」と交流し(⑤)、それらが総合して、『単一回の制作過程・作品』の促進機能として働くと考えられた。

『制作過程』は『制作者の生活・人生・環境』内の「外界・日常生活」と交流している(⑥)。『単一回の制作過程・作品』は『箱庭制作面接のプロセス』内の「説明過程」「セラピスト」と交流している(⑦、⑧)。「説明過程」と「セラピスト」は交流している(⑨)。「内省」は『箱庭制作面接のプロセス』と交流している(⑩)。

上記促進要因間の交流の総合的効果により、「作品の連続性や変化」や箱庭制作面接の最終的目標である「心や生き方の変化・成長」が生まれる。その変化は『箱庭制作面接のプロセス』や『制作過程・作品』にフィードバックされると考えられた(⑪、⑫)。

### Ⅲ-2. 連続性に関する促進機能の詳細と検討

#### 1) 連続性に関する概念の定義と具体例

⑪【単一回の制作過程・作品と作品の連続性や変化の交流】と⑫【箱庭制作面接のプロセスと心や生き方の変化・成長の交流】は、密接に関係しているため、一括して作品の連続性、作品・心・生き方の変化について詳述する。⑪に



写真1 B氏第5回作品 ルーベを覗く星の王子様(自己像、砂箱中央)。砂箱奥に渦巻く情緒(頭をかく小人、悲しむ人、カタツムリ、子ども、怒っている小人)。砂箱手前に、念慮すること(時計、ベッドに横たわる男性、教会、ガラス瓶、ワニ、橋、荷車、大砲、子どもたち)。砂箱四隅に、森。



は作品についての連続性に関する3概念【以前の作品との関連】【作品の変化】【連続性とイメージ特性との関連】があった。【以前の作品との関連】は、今回の構成、作品と以前の回の構成、作品との関連、と定義された。【作品の変化】は、作品の内容の変化、と定義された。【連続性とイメージ特性との関連】は、箱庭制作の連続性とイメージ特性（自律性、集約性、象徴性など）との関連、と定義された。

⑫には3概念【自分の心や生き方への気づき】【心や生き方の変化や成長】【面接内外を貫いて内的プロセスを生きる】があった。【自分の心や生き方への気づき】は、箱庭制作時の「いま・ここ」の内的プロセスや構成から、自分の心や生き方へ気づきが広がるプロセス、と定義された。【心や生き方の変化や成長】は、箱庭制作者の心や生き方における変化や成長、と定義された。【面接内外を貫いて内的プロセスを生きる】は、面接内外で、自己についての気づきや課題などの内的プロセスに、箱庭制作者が主体的に取り組み、その体験を深化しようとする態度、と定義された。

⑪【単一回の制作過程・作品と作品の連続性や変化の交流】の【以前の作品との関連】の具体例を以下に挙げる。B氏は第5回箱庭制作面接でワニを、星の王子様の背後の砂箱中央下に置いた（写真1）。調査的説明過程で調査者は、第2回箱庭制作面接にもそのワニを置いたように思い、質問した。それに答えてB氏はえーと。違うやつ。＜違うやつでしたかね＞はい＜その時はこれか？これでしたね＞そうですね。（中略）この結構口が目について。あれより、も

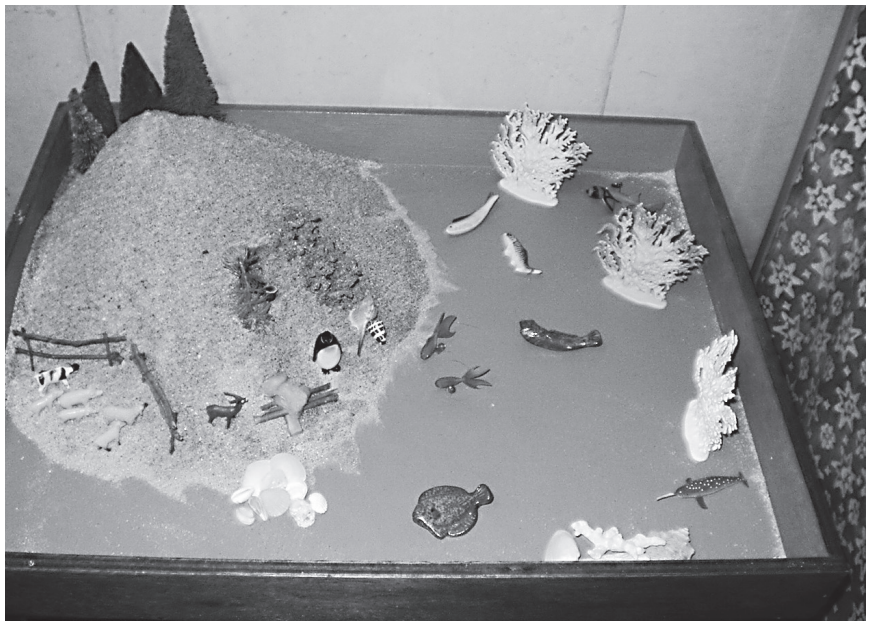


写真2 A氏第6回作品 私がこうするという世界。洞窟に住むペンギン（自己像、島の右下）とペンギンの相棒であるインバラ、焚き火。柵に囲まれた家畜や海の魚はペンギンのえさ。海にサメ、一角獣、サンゴ。

う少し、今日なんか見た感じが、その、ガブッと、というような‘笑’。その、印象を受けて（B氏調査、5-15）、と語った。第2回箱庭制作面接で置いたミニチュアよりも、今回のワニの方が「ガブッ」と噛みつく印象がより強いことが語られた。

A氏は、第6回箱庭制作面接の作品について、調査的説明過程でこれまでは、<うん>そういう、私が、何かするっていうよりも、こういう世界にいる、っていうような感じを、作ってた気がしますね。（中略）今日のはそういう意味では私がこうするっていう世界、ですね（A氏調査、6-13）、と語った。これまでの箱庭制作面接では、自分がこういう世界にいるという作品であったが、今回は、私がこうする世界だと語っている（写真2）。以前の作品との比較によって、作品内の自己の存在様式とその変化についての気づきが述べられている、と捉えられる。

【作品の変化】の具体例を以下に挙げる。A氏は第3回箱庭制作面接で、砂箱中央奥に沖に向かうようにカメ（自己像）を置いた（写真3）そのカメについて、調査的説明過程で1回目のイルカがカメになったなっていう感じ（中略）そっちの方が、イルカ、ま、イルカは、ま、私だったんですけどね、前も。これもカメは私だろうなと思いますけど、このほうが等身大の感じがして、はあ、ぴったりきます（A氏調査、3-13）、と語った。第1回箱庭制作面接では、自己像はイルカであった。それに対して、今回は自己像がカメに変化し、その方が等身大の感じがして、ぴったりすることが語られた。

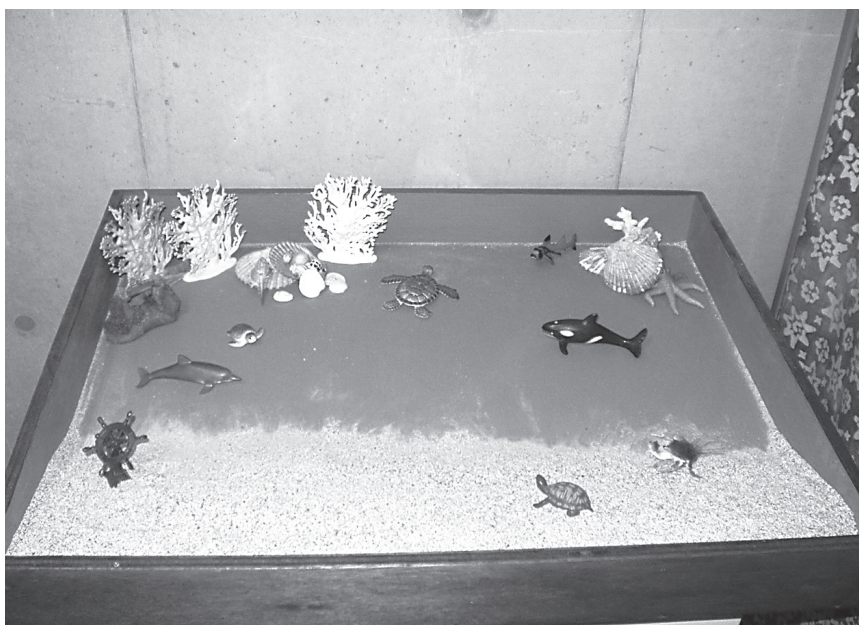


写真3 A氏第3回作品 沖を向く亀（自己像、砂箱中央上）とそれを見守る陸の亀。海にシャチ、カメ、イルカ。砂箱右上に半身を隠したタコ、ネコザメ。砂箱左上に夫婦岩、貝殻、海藻。その奥に隠された金色の貝。

A氏は第6回箱庭制作面接で、山の中央手前にインパラを置いた(写真2)。調査的説明過程でインパラについて、箱庭制作者と調査者との間で以下のような会話が合った。相棒。あ、子分、<子分>子分って言ったかもしれない。うんでもやっぱり、えーっと、思いをそのまま聞いてくれる、相棒って言う感じかな<相棒、思いをそのままきいてくれる>うん、願いはみんなかなえてくれます。<うん。そういう、まあ、仲間とでも、仲間と言うわけでもないし、でも、単なる道具でもないし、>うん<うん、存在っていうのも、こういう形で出てくるのも珍しいよね、何か見てくれる仲間みたいな>あー、今までそうでしたよね。(中略)へえ。へ。<へえ、へ、意外?>ふふ笑う、あの笑あの、そう言えばそうな、ですね。(中略)ほんとですね、私のために何かしてくれる人、なんて初登場。<初登場だよ>は、は、は笑いい気分ですね。<いい気分やね。>ほほほ笑(A氏調査、6-12)。A氏は、調査者との会話を通して、それまでは明確には気づいていなかったが、自分のために何かしてくれる人が初めて登場したことに気づき、それを意外に思うと同時に、いい気分を感じた、と捉えられる。

〔連続性とイメージ特性との関連〕の具体例を以下に挙げる。A氏は第8回箱庭制作面接で、砂箱中央に白い女性の人形を置いた(写真4)。その後、その周りに、今までの箱庭制作面接で使用した動物を置いた。それらの構成について調査的説明過程でだからすごく不思議なんですけど、これ作っている最中、(義母のミニチュアの周りに)なじみの動物を置く時に、なんかこれが母ではなくなって私になっていくっていうような感覚が少しあって、うん、あれあ



写真4 A氏第8回作品 入院中の義母(砂箱中央の白い女性)と周りを囲む親族、自分、看護師、動物達。これがあると、中央の人形達に命が入る感じがする鳥居。

れあれと思いながら。(中略) 私にも母にも共通する何かがあるなっていう(中略) 女性っていう命が持っている何か、意味のようなものを感じるというかね(A氏調査、8-10)、と語った。A氏は、女性のミニチュアを意識的には義母と捉えており、イメージの自律性や集約性が体験されていなかった。しかし、以前使ったなじみの動物を置くこと(連続性)により、自律性や集約性を体験できた。そして、その体験によって、自分と母に共通する女性という命がもっている意味を感じることができた、と捉えられる。

A氏第10回箱庭制作面接の調査的説明過程で、調査者は、第9回箱庭制作面接にも川の構成があったことについて質問した(写真5)。それに対してA氏は第10回箱庭制作面接の作品について、調査的説明過程で、第9回箱庭制作面接の作品と比較して以下のように語った。前回にすごく、映画館があったりね、学校があったり、うん、すごい現実的なエピソードに満ちてたんですけど、(A氏調査、10-前回について) 今度のは、そういうのではない川ですよ、(A氏調査、10-4) 現実的、現実的、首をかしげながら(A氏調査、10-全体的感想) 川はおんなじ様な意味があるのかもしれないけど、(間12秒) もうすこし、その、<うん>(間3秒) 川はおんなじ川かもしれないけれども、(A氏調査、10-4) 出来上がった世界はこないだよりももう少し、奥まったところというか、<あ、奥まったところ>うん、(間6秒) 私の中の奥まったところを作ったなっていう感じがありますね。<あ、ほんと。(間) そうやね>(A氏調査、10-全体的感想) もしその、学校や、映画館があるんだとしたらば、この箱庭はすご

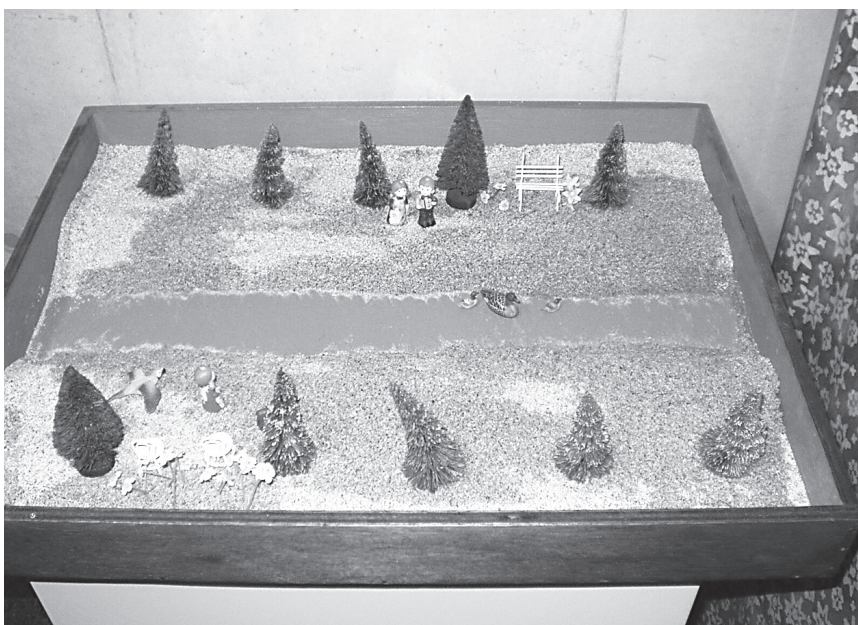


写真5 A氏第10回作品 私の中の奥まったところ。運河沿いの道。砂箱の左側に立って構成された、運河でパキーンと分かれた構図。砂箱手前に女性(自己像)、青い鳥、インバラ。奥に男女の人形、ベンチ。

く大きくって箱庭よりもひと回り大きな辺りを両手で区切りながら'その箱庭のうーんと遠くの方に'くもつとね>ありそうな、はい。感じなんですネ (A氏調査、10-前回の作品との関連)。調査的説明過程で、A氏が前回作品との比較を行ったことによって、今回の作品では自分の奥まったところを作ったという象徴的意味について、箱庭制作過程中よりもさらに明確になった、捉えることができる。

⑫【箱庭制作面接のプロセスと心や生き方の変化・成長の交流】の[自分の心や生き方への気づき]の具体例を以下に挙げる。A氏は、第1回箱庭制作面接で、砂箱左上に置いてあった緑色の家と白とあわい青色の家と交換した(写真6)。その制作過程について、内省報告に白と青の家は落ち着いた、ややさびしい印象。私の内側、ベースはどちらかというどひっそりと静かなものなのだと思う。自分自身にぎやかで活動的とは言えないと思う (A氏内省、1-10、制作・意味)、と記した。第1回箱庭制作面接時点では、A氏は自分のベースはひっそりと静かなもので、活動的ではないと感じていた。

B氏は、第7回箱庭制作面接で4つの区画を作るとともに中央に十字形の構成を行った(写真7)。その4つの区画は、それぞれが小さな箱庭のような感じもあることが語られた。その後、それぞれの区画に、四季を表現していった。さらに四季という表現から、巡っているというイメージが湧いてきた。この十字形の構成について、B氏は調査的説明過程で以下のように語った。それをどいうう風に表現するか、っていうのは、なんか微妙なんですけどね。ええ、例



写真6 A氏第1回作品 砂箱左上にあわい青色の家、マリア像、花、森。イルカ(自己像)と亀(セラピスト像または制作者の内的導き手)。砂箱右下に貝やサンゴ。砂箱中央上の浜辺にガラス瓶。

えば、あの、宗教的に、その神様とか仏様とかってというようなものとも言えるだろうし。その、それは、その、あの、いわゆるもう少し、なんか、その、地球を動かすような、そういった力だとか、言えるだろうし。でも、気持ちの、内的には、そういうことを見させる自分の中にある、なんか、うん、さあ、また、新しい年度をやっていくか、という気持ちを起こさせる、自分自身のなんか、内にあるようなものを、なんか、あの、現実の四季とかじゃなくて、こういうものを見させる、あの自分の感覚の奥にあるものみたいな。そういうものもあるして。で、そうすると、なんか表現しがたいなっていうか（B氏調査、7-全体的感想）。十字形の部分は、巡るという客観世界の動きの中心や核になるものであり、動きを意識している自分の核でもあった。客観的時間の中心でもあり、時間の変化を見させ、新しい年度への気持ちを起こさせるような感覚の奥に存在する自分の内的な核でもあるという多義的な表現であった。この構成を通して、そのような自己の心やあり様への気づきが生まれた、と捉えられる。

【心や生き方の変化や成長】の具体例を以下に挙げる。A氏は第3回箱庭制作面接の箱庭制作過程11で、金色の二枚貝の置き場所を何度も吟味した（写真3）。そして、最終的に、金色の貝殻を海藻の後ろに隠すように置いた。以下にその詳細を記す。

20分31秒～ 金色の二枚貝を砂箱左上の海藻の前に置く。

20分43秒～ 金色の二枚貝を夫婦岩に置きかえる。じっと見つめる。

21分12秒～ 夫婦岩を手前にずらし、その後、金色の二枚貝を置く。

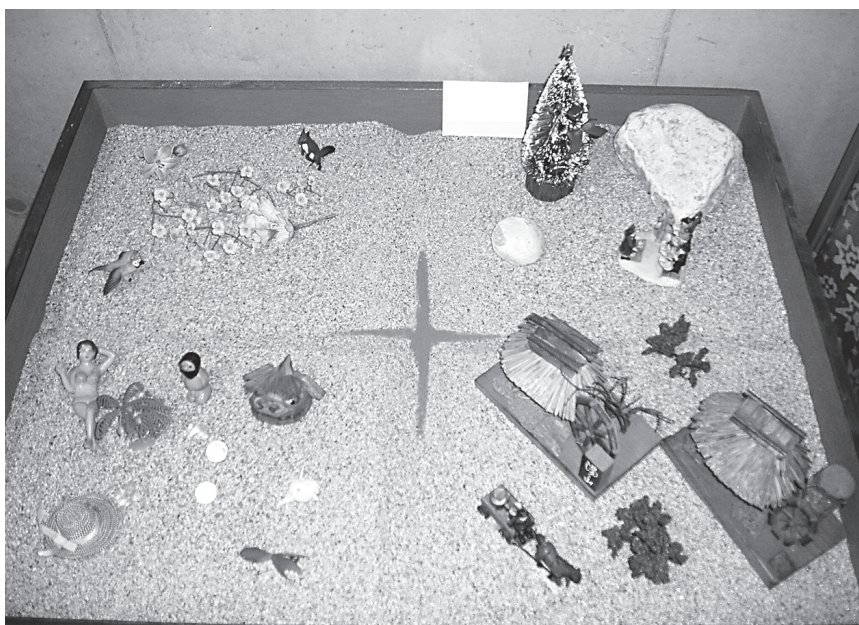


写真7 B氏第7回作品 砂箱中央に十字形。4つの区画に四季。砂箱左上、春（リス、花、青い鳥）。砂箱左下、夏（祭り、水着の人、やしの木、ビー玉、貝殻、帽子、金魚）。砂箱右下、秋（和風の家、実のついた木々、馬車に乗った人）。砂箱右上、冬（クリスマスキャロルを歌う人々、雪がつもった木、白い石）。

21分24秒～21分33秒 金色の二枚貝をオレンジの海藻の後に、隠れるように置く。夫婦岩を元の位置に戻す。

A氏はその制作過程について、内省報告に以下のように記した。最近の私は以前と比べて、いろいろな場面で、いろいろな自己開示をするようになっていく。「すごおく大事」なものは隠しておいたらいいと思うが、拓いてもいい部分は拓いていっていいと感じている。隠すことが、なんだかもったいぶっているように感じ始めているのかもしれない。金色は、「自分はそんなにきらびやかで、素晴らしいわけではない」という気がして、抵抗があった。こう語る私自身は、これまではひよっとしたら随分尊大な自己イメージを持っていたのかもしれない。それが、尊大さは薄れ、ただの、ある意味でとても平凡な一人の人間としていられるようになったのかもしれない（A氏内省、3-11、調査・意味）。A氏は、この箱庭制作過程やそれについての語りを通して、自分の心や生き方の変化に気づいた、と捉えられる。自分が最近、以前に比べて自己開示をするようになったこと、また、以前は尊大な自己イメージをもっていたのかもしれないが、最近はその尊大さが薄れ、平凡な一人の人間としていられるようになったのかもしれないとの気づきをえた。

A氏は、第9回箱庭制作面接の内省報告にドアを開けたらそのまま、自分の欲求のままに現実世界で自由に行動を始めよう。足が軽くなっているというか、からだが出ているというか、頭であれこれ考えなくて、まず体が行動している、そんな感じ（A氏内省、9-全体的感想、調査・意味）、と記した（写真8）。

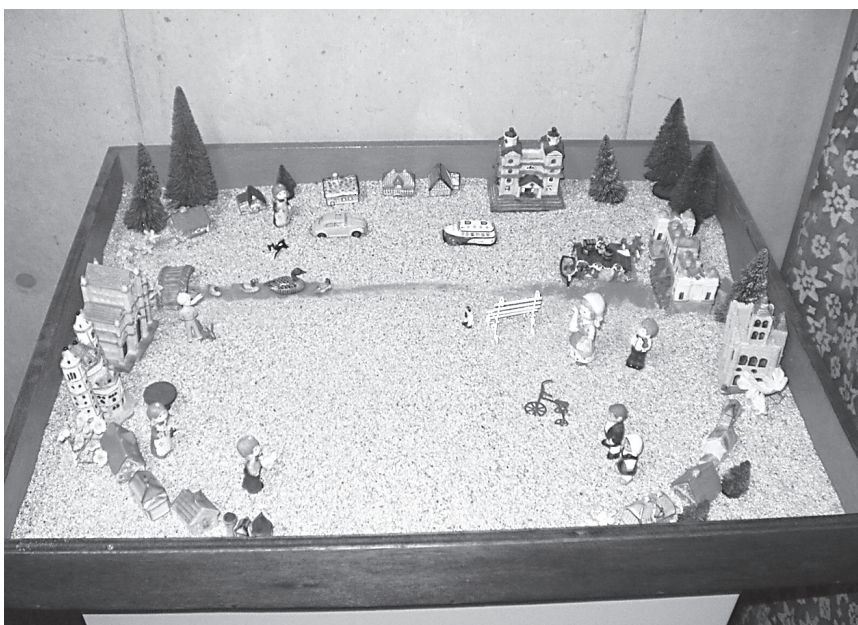


写真8 A氏第9回作品 円形の町の広場の風景。砂箱左側の映画館で映画を観ようとするキツネを連れた星の王子様（自己像）。砂箱右側に教会。川向こうには学校。川に2本の橋。広場には建物、人形、動物、乗り物、ベンチなど。

A氏は、最終回は幸せな箱庭で終わるイメージ、現場に帰るような感じで終わるというイメージをもっていた。第9回箱庭制作面接の箱庭制作過程中に、A氏はそのような気持ちよさを感じた。それは、今までの箱庭制作面接では報告されたことのない感覚であった。上の具体例に示したように、外の現実世界に向かい、足が軽く、自由に身体が行動しているというような身体感覚をこの回で初めて感じた、と捉えられる。

[面接内外を貫いて内的プロセスを生きる]の具体例を以下に挙げる。A氏は、第10回箱庭制作面接の調査的説明過程で、第9回での気づき、第9回と第10回との間の現実生活での試み、第10回の構成の変化について、以下のように語った(写真5)。<今日はこっちに立って、うん、川上から川下の方を、見てつくることも多かったよね>そうですそうです、<そのあたりは>前回は私確か丸いような世界を作ったんですよ。あの、町の並びをね、円形にして、<そうだね>それで、箱庭の中で私はずっとその、丸いモチーフを作るなど、ちょっとそれが、お互いに、こう、すくみあってるみたいで嫌だなんていうのがあったんですけど、<うんうんうん> (A氏調査、10-前回について) それが1週間頭の中にあってなんか、違う位置から見たい、っていう気持ちを、すごく1週間意識してたんです、実は。で、あの、カーナビの、わたしカーナビ使い始めて6ヶ月ぐらい経つんですけど、いつも自分の進行方向が上になるように設定してあったんですね。<うんうん>だけど、あれ、北を上を設定も出来ますよね<出来る出来る>それに変わったんです、最近<へえ、そうなんや>うん、どんなもんかな。私、いつもおんなじ様なルートしか運転しないから、あの、道に迷うことないからちょっと、ちょっと冒険だけど、でも北を上を固定してみよと思ったらば、<うん>すご、おもしろいんですよ、カーナビ見るたびに、すごいおもしろい、私今こんな方角に進んでたんだとか<あー>そういうのがすごくその新鮮と言うか小気味いいというか、何か、私の心の中の世界とそういうことってシンクロしてるような感じがちょっとあって<うん> (A氏調査、10-前回と今回との間のこと) 作るときに、'1歩箱庭に近づいて、箱庭制作者が画面に再登場'あの、今回は丸にしたいくないな、て、とまでは思わないんですけど、<うん> (間9秒) 碁盤の目のように置けない、って言ってた私がいるんですけど、それはもう怖くなくなってる。碁盤の目のようにできそうだな、っていうのを感じながら、こういう配置にはしてみましたね。<はあ> (A氏調査、10-全体的感想) わりとこう、バキーンって手を左から右に川をなぞるように直線的に動かしながら'て分かれてますよね。<そうだね>こう、行になってるから。でもそれが小気味いいし (A氏調査、10-4)。A氏は第9回箱庭制作面接での気づきを踏まえ、現実で自分の進行方向を指し示す方法を変え、それが自分の心の世界とシンクロするような感覚をもった。その変化もあり、第10回で今までと違う位置(砂箱の左側)から、違う構成を試み、それが小気味いいと感じた、と捉えることができる。



B氏第8回（最終回）箱庭制作面接の調査的説明過程で、B氏は今回の箱庭制作を含む、直近複数回の箱庭制作に関する全体的な感想として、以下のように語った（写真9）。日常生活での変化として、第7回箱庭制作面接と第8回箱庭制作面接との間に、B氏に思いがけない転任の打診があった。それは歓びであるとともに、あまりにも予想を超えた打診であったため、戸惑いを感じさせるものであった。あの、結構、その、箱庭の、その、制作をしていて。で、何回くらい前かな、2回くらい、2回くらい確実にあったと思うんですけども、その、言うとしんどい思いを、そのしつつ、という中で箱庭を作り始めて。また、新しい年度の、そういう歩みがまたやってくるっていうような、そういう、あの、気持ちの上での変化とか。まあ、自己修復の兆しみたいなものが出てきて、その中で、こういう話が出てきて。あの、うん、まあ、その、導かれるままに、その、出ていってかかっていうところに辿り着いてったというところでは、まあ、あの、不思議さを感じるとともに、あの、一つの、あの、うん、区切りってというのが、なったのかなという感じるんですけど。<なるほど。なるほど>それがまあ、具体的な、その、●（転任先地名）に行くということでの区切りなのか。それはほんとに今月末にならないと。ただ、なんか、そういうことでは、その、傾向からいったら、いろいろあったけど、また、新しい年度から、また、気持ち新たに歩むかみたいなの、取り組むかみたいなのには、行き着いたのかなっていう感覚はあります（B氏調査、8-全体的感想）。その語りについて、内省報告に、不思議（B氏内省、8-全体的感想、調査・連想）、と記した。つ



写真9 B氏第8回作品 砂箱奥の丘中央にルーベを覗く小人（自己像）。その背後に天使に導かれる人（自己像）。ガラス瓶、木々。下の丘にホウキの乗った人、木々。川に船。海に船、宝船、クジラ、イルカ、ヒラメ。

まり、第6回箱庭制作面接から、箱庭制作に自然や自分が修復されていくテーマが、意図せず顕れ始めた。第7回箱庭制作面接では、4つの区画を作るとともに中央に十字形の構成がなされた。十字形は、巡るという客観的な時空間の核であり、それらを見る自分の内的な核でもあるという多義的な表現であった。巡るという時間の流れは、B氏が今まで箱庭制作面接を重ねる中で、日常生活でも様々なことがあったその過去と、新しい年度を迎えようとする今、心を新たにするような思いが反映したものである、と捉えられた。そのような流れの中で、再出発の打診が現実生活でもあった。このような外的・内的状況の中で、今回の箱庭制作面接で、天使に導かれるままに、新たな場所に出ていくという構成が生まれた。実際に新しい土地に行くという点においても、気持ちの上でも、一つの区切りかと感じた。外的状況・箱庭制作面接・内的状況の一致や展開に、B氏は不思議を感じた、と捉えることができる。

第8回ふりかえり面接でその内省報告について、B氏は以下のように説明した。外的状況・箱庭制作面接・内的状況の一致や展開について、再度語られている。該当部分に下線を記す。

「もしテーマとしていうならば、箱庭の、実際その再出発というところの部分をなにか醸し出して、今回そうなる。実際そうなるっていう。そういう、まあ、精神的な面もそうだし、現実的な面もその、そういう、状況が重なってるかなっていう。そういうことは、言えるかと。ですね。(中略)あの、こういう話が出る話、ある前から、●さん(箱庭制作者の名前)の箱庭は再生だったり、再出発だったりという(はい)ものが、もう、整えられていて、備えられていった。そこに、この現実の話が起こってということは、なんていうかな、きちんと確認しておきたい感じが>そうですね。その順序です。(中略)箱庭でやってたプロセスっていうのは、しんどいとか、いろんな傷つきとか、落胆とか。そういったところの部分との向き合い(?)だったような気がするんです。<なるほど>それと、その過程の後に、いわゆるまた、春が来るかもみたいな、そういうようなところに移っていく中で、あの、この話っていうか、移動の話が出て、っていうことで。まあ、なんか、そういう意味では、実言うと、制作を始める、その、この始めた段階から、実はなにかしらの、なんか、準備期間だったのかなとかという風にも思える、と。あんまり、それを言うと、宗教かってなるんですけど笑。でも、実際、そういうプロセスを歩んできたんだよなーっていうのは、思うんですよ。(中略)そういうところと言えば、結局、なんていうんでしょう。よく連想とか意味のところで、不思議。不思議としか言いようがないところがあって、まあ、でも、まあ実際、うん、その、いわゆる、その、理論で、どう説明しろと言われても困るんですけど、内的な、そういう、探究とか、いわゆる、その、まあ、癒しているか修復のプロセスだけじゃなくて、外的な、そういうところ含めて、なんか、あの、現実には動いていっているんだな。でも、外的な要

因のことにに関して、それが、どういう風に、どうしてそんな風に、言えるのかっていうことは説明しがたいっていうか。というところがあって、なんか、まあ、そこがいいところでもあるんだけど、わかんない人にはわかんないだろうなっていう世界だろうなっていう‘笑’。そういう風に思うんですけど】。

このように、箱庭制作面接の中で、箱庭制作者の意図を越えたところでイメージが自律的に動きだしたこと、それが一つの流れ・テーマとして、箱庭制作面接が展開していったこと、それは単に内的なプロセスにとどまらず、外的現実としても実現されていったことに対して、B氏は説明しがたい不思議を感じた、と捉えられる。コンステレーション（河合隼雄、1991、p.94）という用語を使用したいような不思議な外界と内界の一致がB氏の箱庭制作面接で生じた。

B氏は箱庭制作面接でも、日常生活においても、自分自身の心や生き方、周りの状況や人々に対して、真摯に向き合い、自己の課題に主体的に取り組んでいた。このような態度が、この展開が生じた一因であると、調査者には感じられた。

上に挙げた、A氏第10回箱庭制作面接とB氏第8回（最終回）箱庭制作面接の具体例は、面接内外で、自己についての気づきや課題などの内的プロセスに、制作者が主体的に取り組み、その体験を深化しようとする態度と定義された、**【面接内外を貫いて内的プロセスを生きる】**というあり様を示す具体例である。

## 2) 連続性に関する促進機能の検討

⑪ **【単一回の制作過程・作品と作品の連続性や変化の交流】**と⑫ **【箱庭制作面接のプロセスと心や生き方の変化・成長の交流】**は、密接に関係しているため、一括して作品の連続性、作品・心・生き方の変化について検討する。

⑪ **【単一回の制作過程・作品と作品の連続性や変化の交流】**内の**【以前の作品との関連】** **【作品の変化】**の具体例には、今回の作品とそれ以前の回の作品との関連や変化が示されていた。例えば、A氏第3回箱庭制作面接で、自己像が第1回箱庭制作面接のイルカからカメに変化し、その方が等身大の感じがして、ぴったりすると語られた。ただ、自己像が変化した理由について、A氏自身も明瞭でない部分があった。自己像に関して内省報告で以下のように記された。イルカから亀に、何が変化したのか、と思う。箱庭制作も3回目になり、あまり自分を飾らなくてもいいと思えるようになったのか。陶器のイルカはちょっと作り物っぽくて、ちょっといたいけな感じがして、かわいらしく装っているような気がして、置けなかった。置きたくなかった？今はこの亀が頼もしい（A氏内省、3-複数過程に亘って、調査・意味）。調査的説明過程で語られた「等身大」という言葉と、内省報告に記された「自分を飾らなくてもいいと思えるようになったのか」、陶器のイルカは「いたいけな感じがして、かわいらしく装っている気がして、置けなかった」という言葉は、類似の主観的体験を示している、と捉えられる。それに対して、A氏はカメに対して「頼もしい」と感じている。このカメは、お互いがお互いの動きを規制しているような

輪から外れて、自分の道を進みたいと思い、一人沖に向かった（別稿「箱庭制作者の主観的体験に対する系列的理解を中心とした質的研究」のⅢ-3「1）自己の多様性と能動性の獲得、他者との関係性の変容の詳細」を参照）。A氏第1回箱庭制作面接で、カメはイルカの頼もしい導き手だった。第3回箱庭制作面接における自己像の変化とその行動の変化を、A氏が導き手の知恵や守りの力を自己に取り入れることができたために生じた変化だ、と考えることもできる。第3回箱庭制作面接におけるA氏の自己イメージは、独自の道を歩もうとするほどに頼もしくなった、と捉えられる。

A氏第3回箱庭制作面接では、[心や生き方の変化や成長]の具体例として示した、自己開示に関する変化や自己の尊大さの薄らぎという心や生き方の変化も見られた。箱庭制作面接を継続することによって、A氏の自己イメージや生き方が変化して、それが箱庭制作面接で自己像を表すミニチュアの選択やその構成の変化に表われた、と理解できる。

また、第6回箱庭制作面接でA氏は、これまでの箱庭制作面接では自分がこういう世界にいるという作品であったが、今回は私がこうする世界だ、と語った。A氏第6回箱庭制作面接で、自己像であるペンギンは海で漁をし、家畜を飼い、相棒であるインパラと鳥を探検した。このように自己像が世界により強く関与し、世界を管理している。また、知恵をもち、協働できる相棒といえる存在が初めて現れ、他者との関係性の変容も生まれ始めた、と理解できる。このように作品内の自己の存在様式に変化が見られた。この変化をA氏は私がこうするっていう世界ですねという言葉で表現したのだと、推察できる。箱庭作品に表される自己の内的世界に対して、自己像の関与がより積極的になったことによる作品の変化、と理解できる。

作品の変化と箱庭制作者の心の変化は相互に影響を与え合っていると考えることができる。作品の変化は、箱庭制作者の心の変化を反映し、心の変化が作品の変化を生む。この両者は連動していると考えられる。

⑪【単一回の制作過程・作品と作品の連続性や変化の交流】内の[連続性とイメージ特性との関連]の具体例には、箱庭制作の連続性と自律性、集約性、象徴性などのイメージ特性との関連が示されていた。第8回箱庭制作面接でA氏は、女性のミニチュアを意識的には義母と捉えており、イメージの自律性や集約性が体験されていなかった。しかし、以前使ったなじみの動物を置くこと（連続性）によって、白い女性のイメージが義母から自分自身に変化するというイメージの自律性を体験できた。つまり、白い女性のミニチュアには、義母のイメージだけでなく、自己イメージも含めた女性イメージが集約されていた、と考えられる。そのイメージ体験によって、自分と義母に共通する女性という命がもっている意味を感じることができた、と捉えられた。

また、A氏第10回箱庭制作面接では、調査的説明過程でA氏が前回作品との比較を行ったことによって、イメージの象徴性が体験された。今回の作品では

自分の奥まったところを作ったという象徴的意味が、箱庭制作過程中よりもさらに明確になった、捉えることができた。

このように箱庭制作面接が継続して実施され、その連続性が箱庭制作者のイメージ特性の体験に影響を与える場合があることが示された。イメージは本来的に自律性・集約性・象徴性などの特性をもつと考えられている（河合、1991、p.27-34）。本項の具体例の検討を通して、体験されていなかったイメージ特性が、連続性によって体験される変化が見い出された。このように箱庭制作面接の連続性が箱庭制作者のイメージ体験を促進することが示された。箱庭制作面接の連続性は、箱庭制作面接としての促進機能を持ち、箱庭制作者の自己理解・自己実現・自己成長の促進に寄与すると考えることができる。

⑫【箱庭制作面接のプロセスと心や生き方の変化・成長の交流】内の〔自分の心や生き方への気づき〕〔心や生き方の変化や成長〕の具体例には、箱庭制作時の「いま・ここ」の内的プロセスや構成から、自分の心や生き方へ気づきが広がるプロセスや、箱庭制作者の心や生き方における変化や成長が示された。例えば、B氏第7回箱庭制作面接で構成された十字形は、巡るという客観的な時空間の核であり、それらを見る自分の内的な核でもあるという多義的な表現であった。この構成を通して、B氏は、自己の内界にこのような核が存在することに気づくことができた。そして、その核は、自己の内界を超えて外界や時間という客観的世界とつながり、影響を及ぼすものであった。この構成は、B氏の内界と外界との心の深層部分でのつながりを象徴したもの、と捉えることができる。この構成によってB氏は、自己と客観的世界のあり様やそれらの関連性、宗教性への重要な気づきをえた、と捉えられる。

第9回箱庭制作面接の箱庭制作過程中に、A氏は、最終回のような気持ちよさを感じた。それは、今までの箱庭制作面接では報告されたことのない身体感覚であった。足が軽くなっているというか、からだが出ているというか、頭であれこれ考えなくて、まず体が行動しているというように、身体が外の現実世界に向かい、自由に身体が行動しているというような身体感覚をこの回で初めて感じた、と捉えられた。第7回箱庭制作面接でも、一度は町の風景が構成されたが、その構成に対して、A氏は愛着をもてなかった。そして、第7回箱庭制作面接の調査的説明過程で再構成された作品では、町の風景を構成していたミニチュアは棚に戻され、作品として残らなかった。A氏第9回箱庭制作面接で、最終的な作品として、初めて街の風景が構成された。Kalf (1966) は、箱庭療法における遊びの本質として、内から外への変化を指摘した (p.v)。A氏第9回箱庭制作面接では、内から外への変化は、まずは内界が表現された、街の風景の構成に顕れた。そして、さらに構成を超えて面接外の外界にまで広がっていくような身体感覚が生まれた、と考えられよう。そして、この変化は、〔面接内外を貫いて内的プロセスを生きる〕の具体例に示した、第10回箱庭制作面接で報告された外界と自分の心のシンクロを生む基礎となった、と推測す

ることができる。

【自分の心や生き方への気づき】【心や生き方の変化や成長】の具体例に示された、箱庭制作者の自分の心や生き方へ気づきやその変化や成長は、箱庭制作面接の重要な促進機能の一つである。継続的な箱庭制作面接は、その連続性によって、箱庭制作者の心や生き方の変化や成長を促進することが見い出された。単一回の作品は、それ以前の作品・構成や心・生き方の変化・成長と交流し、それまでの変化を基盤として、さらなる変化・成長を反映したものとなる、と捉えられる。そして、それが次回以降の作品や箱庭制作者の心・生き方に影響を与える、と考えられる。

⑫【箱庭制作面接のプロセスと心や生き方の変化・成長の交流】内の【面接内外を貫いて内的プロセスを生きる】の具体例には、面接内外で、自己についての気づきや課題などの内的プロセスに、箱庭制作者が主体的に取り組み、その体験を深化しようとする態度が示された。例えば、A氏は、第10回箱庭制作面接の調査的説明過程で、第9回での気づき、第9回と第10回間の現実生活での試み、第10回の構成の変化について、語った。その語りから、A氏は第9回箱庭制作面接での気づきを踏まえ、現実で自分の進行方向を指し示す方法を変え、それが自分の心の世界とシンクロするような感覚をもったことが示された。その変化もあり、第10回で今までと違う位置（砂箱の左側）から、違う構成を試みることができた、と捉えることができた。

B氏第8回（最終回）箱庭制作面接の調査的説明過程で、B氏は今回の箱庭制作を含む、直近複数回の箱庭制作に関する全体的な感想を語った。その語りは以下のように捉えることができた。第6回箱庭制作面接から、箱庭制作に自然や自分が修復されていくテーマが、意図せず顕れ始めた。第7回箱庭制作面接では、4つの区画を作るとともに中央に十字形の構成がなされた。十字形は、巡るという客観的な時空間の核であり、それらを見る自分の内的な核でもあるという多義的な表現であった。巡るという時間の流れは、B氏が今まで箱庭制作面接を重ねて中で、日常生活でも様々なことがあったその過去と、新しい年度を迎えようとする今、心を新たにするような思いが反映したものである、と捉えられた。そのような流れの中で、再出発の打診が現実生活でもあった。このような外的・内的状況の中で、今回の箱庭制作面接で、天使に導かれるままに新たな場所に出ていくという構成が生まれた。外的状況・箱庭制作面接・内的状況の一致や展開に、B氏は不思議を感じていた、と捉えることができた。

第8回ふりかえり面接でのB氏の語りは、以下のように捉えることができた。箱庭制作面接の中で、箱庭制作者の意図を越えたところでイメージが自律的に動きだした。それが一つの流れ・テーマとして、箱庭制作面接が展開していった。それは単に内的なプロセスにとどまらず、外的現実としても実現されていた。そして、箱庭制作を始めた段階から何かしらの準備期間だったとも思った。それらのことに対して、B氏は説明しがたい不思議を感じていると、と捉えら

時間経過 場、客観・主観		第9回箱庭制作面接	両面接間の日常生活	第10回箱庭制作面接
箱庭制作面接	客観的事実	円形の街の構成		今までと違う位置から 違う構成の実施
	主観的 体験	すくみあっているようで 嫌だ		碁盤の目のようにおけ そうだ、小気味いい
日常生活	客観的 事実		カーナビの、自分の進行方 向を指し示す方法の変更	
	主観的 体験		違う位置から見たい、おも しろい、小気味いい、心の 世界とシンクロしているよう	

表2 A氏の箱庭制作面接内外での客観的事実と主観的体験

れた。不思議な外界と内界の一致は、コンステレーションと理解できた。また、B氏は箱庭制作面接の中でも日常生活においても、自分自身の心や生き方、周りの状況や人々に対して、真摯に向き合い、自己の課題に主体的に取り組んでいたことが、このような展開が生じた一因であると、調査者には感じられた。

両具体例には、外界と内界、日常生活と箱庭制作面接との間の一致、シンクロが示された。このような一致は、コンステレーションという概念で理解することができた。そして、同時に、**「面接内外を貫いて内的プロセスを生きる」**という観点からも捉えることができた。河合隼雄（1993）は、セラピストがコンステレーションを読むことやコンステレーションが起りやすい状況にもっていくことについて述べている（pp.67-71）。**「面接内外を貫いて内的プロセスを生きる」**は、コンステレーションが生まれることやコンステレーションを読むことの一側面と考えることができるのかもしれない。**「面接内外を貫いて内的プロセスを生きる」**は、河合隼雄（1987）の「夢を生きる」という考えを参照し、命名・定義された概念である。河合は「夢を生きる」ということについて、セノイ族の夢に対する態度についての述べた後に、「夢に対するこのような態度は、自分の夢を傍観者として『見る』のではなく、それを主体的に『体験』し、深化して自らのものとする、ということが出来る」と述べている（pp.30-31）。

**「面接内外を貫いて内的プロセスを生きる」**の具体例が特徴的であるのは、箱庭制作者自身が外界と内界、日常生活と箱庭制作面接との間の一致、シンクロに気づき、報告し、意味を見出している点にある。A氏第10回箱庭制作面接での構成と報告を表2に整理する。A氏は、第9回箱庭制作面接の円形の構成について、お互いにすくみあっているようで嫌だと感じた。それを日常でも意識し、違う位置から見たいと感じていた。そして、カーナビの設定を変更した。自分の進行方向を指し示す方法の変化とそれによって生じた感情から、外的に起こっていることと自分の心の世界とがシンクロしていると、A氏自身が気づいた。その気づきを基にして、第10回箱庭制作面接でA氏には、今までとは違う場所から、今までとは違う構成を行うという行動レベルでの変化が生まれた。A氏はその構成にも小気味よさを感じた。

B氏の第8回箱庭制作面接および第8回ふりかえり面接における語りもま

時間経過 場、客観・主観		第6回箱庭制作面接	第7回箱庭制作面接	両面接間の 日常生活	第8回箱庭制作面接	第8回ふりか えり面接
箱庭制作 面接	客観的 事実	自然の再生の 構成、人の生 活の痕跡	4つの区画と中央 の十字形の構成		船出、天使に導 かれる人	
	主観的 体験	再生のイメ ージ、人の歩 みの歴史	4つの区画：四季、 巡るイメージ。 十字形：根底にあ る内的・外的な核 のイメージ		不思議な導き、 信仰、数回前か らの自己修復の 兆し、内的・外 的区切り	
日常生活	客観的 事実			予想しない 転任の打診		
	主観的 体験			歓びと戸感 い		

表3 B氏の箱庭制作面接内外での客観的事実と主観的体験

た、外的状況・箱庭制作面接・内的状況の一致や展開について、B氏自身が感じ、気づいたことである。そして、その気づきに対して、意味を付与している。それを表3に整理する。第6回箱庭制作面接から、箱庭の構成に再生というテーマが意図せず顕れ、自然や自分が修復されていくという内的意味を感じた。第7回箱庭制作面接で、十字形の構成がなされた。それは客観的・主観的時間の核であり、根底にあるものであった。第7回箱庭制作面接と第8回箱庭制作面接の間に、予想しない転任の打診があり、歓びと戸惑いを感じた。不思議な導きを感じ、第8回箱庭制作面接で船出と天使に導かれていく人という構成がなされた。また、第6回箱庭制作面接のことから生じ始めた自己修復の兆しや、内的な区切り・新年度からの転任の地での仕事という外的な区切りを感じた。第8回ふりかえり面接では、内的・外的状況の一致に関する不思議さを語った。箱庭制作面接開始時点から、なんらかの準備期間であったような感じ、内的・外的出来事の一一致を理解する一面として、宗教的な要素を挙げた。

このように外的状況と内的状況の一致に気づき、その意味を付与しているのは、箱庭制作者自身である。石原（2013）は、「クライアントにとって作られた箱庭は、クライアントの『精神的状況』を表し、クライアントの『内的世界』が『外的世界へ移され』たものとして理解されることが一般的である。箱庭を系列的に理解するというときにも、繰り返し作られる箱庭表現の変化をクライアントの『精神的状況』の変化として、あるいは箱庭という『外的世界』の変化をクライアントの『内的世界』の変化として捉えていく。箱庭表現の変化をこのように理解する視点は、いわば、箱庭表現をクライアント個人に属するものとして捉えるイントラパーソナルintrapersonalな視点と言えるだろう」と述べている。続けて、クライアントとセラピストの関係を土台としてクライアントの箱庭表現が行われるというときには、インターパーソナルinterpersonalな視点があるとしている。そして、箱庭表現はその両要因を掛け合わせたところに現れてくるものであると捉えている（p.16）。本項では、クライアントーセラピスト関係を取り上げていないため、その関係性からのインターパーソナルな



視点について検討することはできない。しかし、そのかわりに、本項では、人々との関係性も含めた外的世界と箱庭制作者との関係性についての視点を、インターパーソナルな視点とすることができるだろう。すると、両調査参加者はそれぞれに、イントラパーソナルな視点とインターパーソナルな視点の両視点から、箱庭制作面接内外の客観的事実と主観的体験に目を向け、外的状況と内的状況が一致することを気づいた、と理解することもできる。そのような気づきを基盤として、箱庭制作者が面接内外で、自己についての気づきや課題などの内的プロセスに主体的に取り組み、その体験を深化しようとする態度によって、箱庭制作者自身がコンステレーションを読み、意味を与えることができるようになった、と考えることができよう。

通常の箱庭療法においても、箱庭制作者自身がイントラパーソナルな視点とインターパーソナルな両視点をもって、外的状況と内的状況の一致に目を向け、気づくということは起こりうるだろう。それに加えて、本研究法は、箱庭制作者がこれら両視点をもつことに影響を及ぼしていた可能性がある。この点に関して、現在のところ、それを示す直接的なデータに基づくものではないため、あくまでも調査者の推測の域をでないものであるが、以下に記していく。

「Ⅱ. 方法」に示したように、本研究法は、箱庭制作面接に対する箱庭制作者の内省を促す\*1。箱庭制作者は自宅でVTRを視聴し、内省報告を記す。箱庭制作面接のふりかえりを自宅という箱庭制作面接外の場所で、内省報告を記すためにていねいに行うことになる。それに費やす時間は、未確認だが、少なくとも数時間はかかるだろう。そして、その内省報告をふりかえり面接で、調査者に語ることを通して、再度内省する。箱庭制作面接の約1ヶ月後には、ふりかえり面接がある。約1ヶ月の間に、箱庭制作者は、同じ回の箱庭制作過程や説明過程や作品に3度向き合うことになる。このように、箱庭制作者は、自分の箱庭制作面接や自己の心や生き方に、インテンシブに関与し、向き合う。また、箱庭制作面接の内的プロセスを、VTR視聴と内省報告作成を通して、面接外の自宅という日常生活に持ち込むことにもなる。このような集中的な関与や日常生活への箱庭制作面接の内的プロセスの持ち込みは、**【面接内外を貫いて内的プロセスを生きる】**というあり様を生む一因になったのかもしれない。このような状況が影響して、自分の心や生き方、それに影響力をもっている周りの人々、出来事、それらが実際に起こる場である箱庭制作面接外の外的世界への感受性が高まっていったのではないだろうか？

⑥ **【制作過程と外界・日常生活の交流】**内に**【面接外の出来事や生き方と制作中の内的プロセスの連動】**という概念がある。この概念は、面接外の要因と箱庭制作過程における内的プロセスとが連動し、構成されるプロセスやそれによる制作者の気づき、と定義された。この概念は、本項で検討していることと関連が深いと考えられるため、具体例を一つ以下に示す。この具体例は、A氏第8回箱庭制作面接で砂箱中央に置かれた白い女性の人形に関するものであ

る。義母は1週間前に手術をし、この時点でも入院中であった。A氏も付き添いを行っていた。義母は入院中、震度9の地震にあう夢を見て、ベッドから落ちてけがをした。現実と夢の世界が、自分にはわからなくなってしまったと言って、義母はひどく悲しんだ。そのような義母のことがA氏はとても気がかりだった。第8回箱庭制作面接の自発的説明過程で、A氏は以下のように語った。今日、何を作ろうかなと思ったときにその、母親のことがばーっと浮かんできて、(A氏自発、8-5) というか、何を作ったらいいかぜんぜんわからなかったの、玩具を見に行ったら、(A氏自発、8-4) この白い人形があって、これを見てこれを見て母のことをばーっと、浮かんできたんですね (A氏自発、8-5)。棚に置かれた白い人形を見て、義母のことがばーっと浮かんできたことが語られた。ミニチュアによって喚起された義母を巡る記憶や思いが勢いをもってA氏に迫ってきた、と捉えられる。この具体例から、日常生活での出来事やそれについての自分の思いと、箱庭制作過程での内的プロセスが密接に関連する場合があることが示された。この後の箱庭制作過程で、A氏は義母の周りに自分たちを表すミニチュアを置いた。そのような構成を通して、義母と自分に共通する女性という命がもつ意味を実感した。このように外的状況と内的状況が密接に関連しあい、連動し、箱庭制作者が自分の心や生き方やそれに関連する他者への気づきが生まれることがある。イントラパーソナルな視点とインターパーソナルな両視点を箱庭制作者がもち、自己や取り巻く外的世界に気づき、読み、意味を付与している。ここに挙げたような力や態度を育むことに、本研究法が一定の影響を与えた、と考えることはできないだろうか？もちろん、楠本(2013a)で考察したように、本研究法は限界や課題も持っている\*2。同時に、ここに記したような影響を本研究法が箱庭制作者に及ぼしていた可能性があると思われる。

〔面接内外を貫いて内的プロセスを生きる〕を別の観点から考える必要があるだろう。それは、本稿の箱庭制作者の2人共に、外的状況・箱庭制作面接・内的状況の一致が生じている点である。調査参加者はわずか2人であるため、これが確率として高いのかどうかを統計的に検定するようなことはできない。ただ、2人共に〔面接内外を貫いて内的プロセスを生きる〕と概念化できるような主観的体験や事象が生じたことについて検討が必要である、と考える。

表2に示したように、A氏の例では、第9回箱庭制作面接における構成やそこに表された自分の心理的特性について、箱庭制作者自身が気づき、変化を求めた。そして、それがカーナビの表示の変更という行動を生んだ。その表示の変更という外的な変化が、自分の心の世界とシンクロしているように感じた。その場合の心の世界の変化とは、丸いモチーフでお互いにすくみあっている内的世界から離れ、それとは異なる心理的状況や生き方への変容を指している、と推論できる。別の捉え方をすれば、自分の進む道を指し示すものが内的世界にあるとするならば、その表示方法が変更されることで、自分の内的世界の見

え方やその世界における自分の進行の見え方が大きく変わった主観的体験ということもできるだろう。そして、そのような変化によって、次の箱庭制作面接において自分の立ち位置を変え、今までとは異なる行になった構成がなされた。その構成は、A氏の内的な変化を反映したものであった、と捉えることができる。

表3に示したように、B氏の例では、第6回および第7回箱庭制作面接において、心の深層のイメージを含んだ表現が構成された。その後、日常生活において、予想もしない転任の打診があった。第8回箱庭制作面接において、構成・報告されたように、B氏はその打診に不思議な導きを感じ、天使に導かれる人の構成を行った。そして、その箱庭制作面接とそのふりかえり面接で、外的状況・箱庭制作面接・内的状況の一致と展開、それを巡る不思議さについて語った。

A氏の例では、箱庭制作面接における構成からの気づきと変化への求めが先行し、その後の意識的・意図的な外的状況への働きかけが大きな要因となっている。つまり、気づきに続く、意識的働きかけが大きな鍵となっている。それに対して、B氏の例では、意図せぬ構成の変化が先行し、それに続いて、外的な要因が加わり、その一致に不思議な導きという意味を付与していることが鍵となっている。このように両氏の過程を比較すると、意識的働きかけと無意識的動きの順序性は合致していない。このような違いがあることを認めた上で、共通する要因を探っていきたい。共通性は、a.意識と無意識とを含めた心全体の状況、b.面接内外における箱庭制作者の全人的なコミットメントにある、と考えられる。

a.意識と無意識とを含めた心全体の状況について、検討する。Jung (1967) は、内的なイメージについて、以下のように述べている。イメージは心の全般的状況を凝縮して表している。イメージはその時々には配置されている内容だけを表し、その配置は無意識の活動や意識状態によって生じる。この意識状態は識閥下にある素材のうち関係のあるものの活動を促し、関係のないものを抑制する。このようにイメージはその時々は無意識と意識の状況を表している (pp.447-448)。Jungのこの考えによると、箱庭制作面接で表現される内的イメージは、意識と無意識を含めた心の全体状況と関連している。そして、意識の状況が無意識に影響を与え、無意識のある部分を活性化させ、ある特定のイメージが生じてくることが示されている。

A氏の例では、箱庭制作面接における構成からの気づきと変化への求めが先行し、その後、意識的・意図的な外的状況への働きかけが大きな要因となっている、と述べた。しかし、A氏第8回箱庭制作面接では、先に検討したように、[面接外の出来事や生き方と制作中の内的プロセスの連動] が生じ、イメージの自律性によって、義母と自分に共通する女性という命がもつ意味を実感した。箱庭制作面接が継続される中で、A氏の意識は無意識からの作用を受けている。別稿「箱庭制作者の主観的体験に対する系列的理解を中心とした質的研究」で詳しく記述・検討するように、B氏の場合、第2回から5回箱庭制作面

接では、外的現実の要素が反映された箱庭作品が作られた。それが第6回箱庭制作面接では一転して、次元が異なると感じられるような作品となった。これは無意識の補償作用、超越機能<sup>\*3</sup>と捉えることができる (Jung, 1971, p.89)。両氏の箱庭制作面接において、意識と無意識との交流が、継続した箱庭制作面接の中で行われている。このような交流が母胎となって、ここで検討しているような「面接内外を貫いて内的プロセスを生きる」という態度やそれに関連する事象が生じた、と考えることができよう。

次に、b.面接内外における箱庭制作者の全人的なコミットメントについて検討する。河合隼雄 (1993) がコンステレーションについて述べていることを確認したい。河合は、クロッパーとシュピーゲルマンの論文の中に記された、マイヤーはクライアントの自己実現の過程をコンステレートするセラピストであるとの論を紹介している (pp.51-53)。また、コンステレーションと全人的なかわりとの関連について言及している (p.65)。そして、コンステレーションが起りやすくなる状況として、「何事が起ころうと大丈夫というふうに開かれた態度」を挙げている。河合の指摘は主にセラピストの態度について述べたものであるが、同時に、クライアントの態度でもある、と考えられる。そして、セラピストがクライアントである「その人がどう動いていこうと大丈夫ですよという風にしていて、その人の心の中から深いことが出てくる」。それが、コンステレーションが起りやすい状況だとしている (pp.69-70)。

先に検討したように、本研究法は、箱庭制作面接に対する箱庭制作者の内省を促す。また、本稿の箱庭制作者は、面接内外で自己や外的状況に開かれた態度で、真摯に向き合っている。本稿の箱庭制作者は、意図せず生まれた無意識の表現が含まれた箱庭の構成に開かれた態度で向き合っている (例、A氏第8回箱庭制作面接、B氏第6回箱庭制作面接)。箱庭制作面接内外で、今までとは違った行為を意図的に行っている (例、A氏第9回と第10回箱庭制作面接の間の日常生活に関する報告、A氏第10回箱庭制作面接)。日常生活で起こった事象から生じた自己の内的プロセスにも気づいている (例、B氏第7回と第8回箱庭制作面接の間での日常生活に関する報告)。このような態度は、河合のいう「何事が起ころうと大丈夫というふうに開かれた態度」を箱庭制作者がとっている、考えられるのではないだろうか。そして、このような態度や意識状態が、無意識の深い層にある素材の活動をも活性化し、ある布置が生じる。その心の全般的状況が箱庭制作面接においてイメージとして表わされる、と考えることができよう。その箱庭制作面接で生まれたイメージを箱庭制作者は日常生活においても、向き合い、深く内省している (例、B氏第8回ふりかえり面接での語り)。このような箱庭制作者の全人的なコミットメントが、外的状況・箱庭制作面接・内的状況の一致や展開を生む一因だと考えることができないだろうか。

つまり、「面接内外を貫いて内的プロセスを生きる」は、面接内外のプロセスの交流によって生じた連続性とみることができよう。箱庭制作面接で生じた

イメージやそれに関連する内的プロセスを、箱庭制作者は「面接内外を貫いて内的プロセスを生きる」という態度によって箱庭制作面接内外で意識し、生きている。このような主体的に自己の内的プロセスに向き合うことや、意図を超えたものにも開かれ、真摯に向きあい、体験を深化しようとする態度によって、面接内外のプロセスが連動・総合される。そのような連動によって、面接内外を貫く連続性やコンステレーションが生まれやすくなると考えられないだろうか。先にも述べたように、ここに挙げた考えを直接的に示す両箱庭制作者のデータに当たることができていない。そのため、ここに述べたことは、本稿のデータを基にして、調査者が推論したことである。

しかし、少なくとも本稿のデータから、「面接内外を貫いて内的プロセスを生きる」という面接内外のプロセスの連動が、箱庭制作者の自己理解・自己実現・自己成長の促進に寄与していることは確認できた。これは、箱庭制作面接の内外で、自己のプロセスに集中し、自己をかけることによって生起する箱庭制作面接の促進機能と考えられる。

継続的な箱庭制作面接における箱庭制作者の主観的体験のデータを基に、面接の連続性に関する促進機能について検討することを目的として、⑪【単一回の制作過程・作品と作品の連続性や変化の交流】と⑫【箱庭制作面接のプロセスと心や生き方の変化・成長の交流】内の概念を検討した。この検討から、箱庭制作面接の連続性は、箱庭制作面接としての促進機能をもち、箱庭制作者の自己理解・自己実現・自己成長の促進に寄与することが確認できた、と考える。

#### IV. 結論

本稿は、継続的な箱庭制作面接における箱庭制作者の主観的体験のデータを基に、面接の連続性に関する促進機能の理論生成を目的とした。

二人の調査参加者の継続的な箱庭制作面接のデータをM-GTAを用いて分析した。本稿の目的を達成するため、その分析結果の内、⑪【単一回の制作過程・作品と作品の連続性や変化の交流】と⑫【箱庭制作面接のプロセスと心や生き方の変化・成長の交流】内の6概念について、検討した。検討の結果、連続性の促進機能が確認された。箱庭制作面接の連続性により、箱庭作品、箱庭制作者の心や生き方に変化が生まれ、箱庭制作者の自己理解・自己実現・自己成長が促進されることが見いだされた。また、箱庭制作面接の連続性が、箱庭制作者のイメージ体験（自律性、集約性、象徴性など）を促進することが見いだされた。面接内外で、自己についての気づきや課題などの内的プロセスに、箱庭制作者が主体的に取り組み、その体験を深化しようとする態度が見いだされ、概念「面接内外を貫いて内的プロセスを生きる」が生成された。本概念に示されるような態度は、箱庭制作者自身がコンステレーションに気づき、それを読み、意味を与えることができるようになる一要因となる、と考えられた。また、本概念は、面接内外のプロセスの交流により生起した連続性とみることができ

た。本概念に示されるような態度によって、面接内外のプロセスが連動・総合されて、面接内外を貫く連続性が生まれる、と考えられた。

#### 注：

- \* 1 楠本（2012）について、研究会で発表したことがある。その際、箱庭療法の専門家でもある参加者の方から、本研究法について、「箱庭に対して、集中内観をしているような研究法だ」とのコメントをいただいたことがある。
- \* 2 ふりかえり面接は内的プロセスの深まりを小休止させる危険が示唆された。また、ビデオ視聴による内省報告作成は、研究への関与・動機づけが強くないと継続が難しいため、調査参加者の選択や意思確認に慎重な検討・配慮が必要である。さらに、内省報告により、過度の知性化を起ささないための配慮も必要だった。
- \* 3 Jung（1971）は、意識と無意識の乖離の調停に関して、「無意識内容の、意識の一面性に対する補償としての意味を認識し、考慮に入れなければならない。無意識の傾向と意識の傾向とは、すなわちここに言う超越機能を成り立たせる二つの要素にほかならない。これを超越と呼ぶのは、一つの態度からもう一つの態度への移行が、有機的に行われるからである」と述べている（p.89）。

#### 謝辞：

佛教大学博士後期課程在学中より、石原宏先生には、たびたびご指導いただき、深く感謝いたします。また、原稿内容を確認し、公表を承諾くださった両調査参加者に深謝します。

#### 付記：

本稿は、2013年度南山大学パッヘ研究奨励金 I-A-2 による成果の一部である。

#### 引用文献

- 花形武：初回箱庭制作における内的プロセスについて —箱庭制作経験のない大学生・大学院生を対象に修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて— 箱庭療法学研究,25(2),91-100.2012
- 平松清志：箱庭療法のプロセス —学校教育臨床と基礎的研究— 金剛出版.2001
- 石原宏：PAC分析による箱庭作品へのアプローチ. 箱庭療法学研究,12(2),3-13.1999
- 石原宏：制作者の体験からみた箱庭療法の「治療的要因」に関する心理臨床学的研究. 平成17・18・19年度科学研究補助金若手研究(B)研究成果報告書.2008

- 石原宏：クライアントとセラピストの関係性の違いが箱庭表現に及ぼす影響についての一考察 —箱庭療法の臨床事例で起きたある出来事を手がかりに—。 佛教大学教育学部論集,24,1-19.2013
- 伊藤真理子：イメージと意識の関係性からみた箱庭制作過程。 箱庭療法学研究,17(2),51-64. 2005
- Jung,C.G.:Psychologischen typen.Rascher Verlag,Zürich,1967(林道義訳：タイプ論,みすず書房,1987)
- Jung,C.G.:Die transzendente funktion in C.G.Jung G.W.Bd.8.Walter Verlag,1971(松代洋一訳：創造する無意識,ポストモダン叢書,11,朝日出版社,1985)
- Kalff,D. : Sandspiel:Seine therapeutische wirkung auf die psyche. Zürich und Stuttgart: Rasher Verlag, 1966 (河合隼雄監修 大原貢・山中康裕訳:カルフ箱庭療法,誠信書房,1972)
- 河合隼雄(編)：箱庭療法入門,誠信書房,1969
- 河合隼雄：明恵夢を生きる,京都松柏社,1987
- 河合隼雄：イメージの心理学,青土社,1991
- 河合隼雄：物語と人間の科学,岩波書店,1993
- 木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 —質的研究への誘い—, 弘文堂,2003
- 楠本和彦：箱庭制作者の自己実現を促進する諸要因間の相互作用(交流)に関する質的研究。 箱庭療法学研究,25(1),51-64.2012
- 楠本和彦：箱庭制作者の主観的体験に関する単一事例の質的研究。 箱庭療法学研究,25(3),3-17.2013a
- 楠本和彦：箱庭制作過程・説明過程に関する調査研究についての文献研究,人間関係研究,南山大学人間関係研究センター,12,54-70.2013b
- 近田佳江・清水伸介：制作者の主観的体験からみた箱庭表現過程,北星学園大学社会福祉学部北星論集,43,35-57.2006
- 中道泰子：箱庭療法の心層 —内的交流に迫る—,創元社,2010
- 大石真吾：箱庭制作における砂の作用に関する一研究 —作り手の主観的体験にもとづいて—。 箱庭療法学研究,22(2),63-71. 2010
- 清水亜紀子：箱庭制作場面への立ち合いの意義について —ビデオ記録を用いたプロセス研究の試み—。 箱庭療法学研究,17(1),33-49.2004